# スターティングオーバー

景山民夫

中公文庫

# スターティング・オーバー

定価はカバーに表示してあります。

1996年8月3日印刷
1996年8月18日発行

著　者　景山民夫（かげやま たみお）

発行者　嶋中鵬二

発行所　中央公論社　〒104 東京都中央区京橋2-8-7　振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)

©1996 CHUOKORON-SHA,INC. / Tamio Kageyama

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 本州製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-202668-7　C1195　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

# スターティング・オーバー

景山民夫

中央公論社

スターティング・オーバー＊目次

文庫のためのまえがき……11

1月

ワタクシ、民主主義もういりません！……15

九州と四国で体験した正しい正月ボケ……23

友人の葬儀に出て考えた僕の44年間……29

2月

興味本位で戦争ニュースを見る卑しさ……38

結局政府に器量人がいなかったんだ……45

ペルシャ湾の重油除去に総員出動せよ……51

危機がやってくるような気がする……56

3月

本当に仕事はすべてに優先なのか……64

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ニュースを聞きつつイラクの春を思う……71
領土なんて地球からの借り物なんだぜ……76
あのCFをワタシャ許しませんからね……82
環境問題を語る〝資格〟ってあるんだぜ……89

4月

ああ、世間にはまだ粋な人がいるんだ……96
子供を金でつなぎとめる親の情けなさ……102
屋久島の紀元杉は人間を嫌っていたよ……108
落ちてしまった桜の花ビラはゴミかね……114

5月

ふん、ふん、ふん、東京なんてなにさ……120
ワシら、何しに生まれてきたわけ？……126
「超能力」ってのもそれなりにバカにできないんですよ……132
犬の散歩にも必ず出会いと発見はある……139

6月

動物を押しこめておく権利があるのか……146
なぜ彼はシャチの海から去ったのか……152
ミッキーさんのように美しく老けたい……158
某週刊誌のあのグラビアは一体なんだ……164
7月
交通事故にあってひまいまひた……169
愛のない仕事しててて幸せですか？……176
クルマはちゃんと使おうね……182
マスコミに任せきっていなかったか……187
8月
フィクション波瀾万丈現実平穏がいい……194
シャレも通じないんじゃしょうがないや……199
ワッハッハッハ、ついに夏休みなのだ……204
9月
三十年前ああいう目をした人がいた……209

おーい、バリのお兄ちゃんに座布団三枚……214
ワタシがK社の仕事をしない理由……219
10月
野坂さんありがとうございました……226
カミさんと小津安二郎してしまった……232
カミさんと離婚させられてしまった!?……238
11月
やっぱりお天道さまはありがたいな……244
家の中にあふれかえるピッピッピー……250
黄色いビニール袋を下げたセコイ奴……255
深夜見知らぬ人から頂戴した言葉……260
学園祭の講演で五百人相手に力が入る……266
12月
二十一世紀は本当に来るのだろうか……272
国際クジラ・イルカ会議の日本代表に……277

クーラーの中で師走を過ごす……283
そろそろ人間本来の姿に返りましょうや……288
あとがき……295

スターティング・オーバー　僕の1991年

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

# 文庫のためのまえがき

あれからもう五年の歳月が過ぎようとしている。あれから、というのは一九九一年の夏から冬にかけて僕がその渦中にあった、所謂「フライデー事件」のことをさしている。あの出来事は、もう一般の方の脳裏からは消えているかもしれない。そして当事者の一人である僕の心の中でも、一九九五年十月三十日の東京高裁での名誉棄損の成立、相手方に対する損害賠償支払い命令の勝利判決という形で、一応の決着はついているのかもしれない。だが、当時僕や僕の周辺の人々が実際にどういったことを体験し、あるいはマスコミによってどのように取り上げられたかということは、僕の心の中で決して風化してはいない。

形こそ違え、僕たちが経験したのと同様のことは、現在でも起こっているし、これからも起きる可能性があるからだ。

本書はあとがきにもあるように、一九九一年という、僕にとってはおそらく一生忘れることの出来ないであろう一年間に、『週刊朝日』に連載していたエッセイを元に、その後の心境などを加筆したものである。それは僕にとっては生まれて初めてといってもよい「戦い」の年だった。

そして、戦った相手は正面の敵である『フライデー』誌だけではなかった。それがどのような、そして誰との戦いであったかは、本文と付記をお読みいただければ明らかだから、ここで詳しくは述べない。

しかし、今世紀初頭に、かの碩学ルドルフ・シュタイナーがいみじくも述べているように「現代の悪魔は活字から入ってくる」というのは事実であるということを、本書は立証していると思う。そしてメディアがシュタイナーの時代よりもずっと発達した現代においては、活字のみならず、すべてのマスメディアがその危険性をはらんでいるということも、また事実である。

戦いを止めたとき、あるいは戦うことを諦めたとき、邪悪なるものは容赦なく人の心を蹂躙する。

僕の一年間の体験を通じて、本書を読まれる方々の心に邪悪なるものと戦う勇気が

湧いてくれば、著者としてそれに勝る喜びはない。もっとも、戦いの話だけではなく、けっこう下らない話題も沢山収録されていますけどね。

一九九六年初夏

景山民夫

# 1月

## ワタクシ、民主主義もういりません！

今年は年末のジャンボ宝くじをとうとう買わなかった。何だかついに買う気が起こらず、今日気付いたら、引き換え用の薄っぺらな紙切れを財布に仕舞ったままだった。

宝くじというものを生まれて初めて買ったのは、いまから十二年前のことだ。恥ずかしい話だが、離婚直後のメチャ貧乏な、常にポケットに手を突っ込んで、そこの中にある百円玉の枚数を確認しつつ生活しているような日々だったと思う。そういうときに、テレビの年末番組のロケで浅草に行った。リハーサルと本番の合間の食事時間に浅草寺にお詣りして、仲見世を抜け、ふと気付くと目の前に宝くじの売り場があって数人の人が並んでいる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com